
 学 会 記 事

 第10回日本東洋医学会
 関東北信越支部新潟県部会

日 時 平成13年9月9日(日)
 午後0時45分～5時
 会 場 新潟市万代市民会館
 4階研修室

I. 特別講演

1 脳血管障害と漢方

 嶋田 豊(富山医科薬科大学
 和漢診療学)

近年,日本では高齢化社会が急速に進み,それに伴って高齢者の脳血管障害に対する対応が大きな問題となってきている.一方,和漢薬は多臓器に疾患を抱えがちで薬の副作用も出現しやすい高齢者にとって,好ましい治療手段の一つとして認識されつつある.今回は,これまでに当教室で行なってきた脳血管障害と関連した臨床的及び基礎的研究の成果について,特に桂枝茯苓丸と釣藤散を中心に紹介してみたい.

漢方医学では瘀血という概念があり,最近の研究によって,この瘀血と微小循環が密接に関連することが明らかとなってきた.即ち,瘀血の重症度と血液粘度,赤血球集合能,赤血球変形能などの血液レオロジー因子が相関し,駆瘀血剤である桂枝茯苓丸は,瘀血病態を改善すると同時に血液レオロジー因子も改善することが分かってきた.さらに,基礎的研究によって,桂枝茯苓丸の血液弛緩作用,抗動脈硬化作用,神経細胞保護作用等が確認されている.

我々は以前,プラセボを対照とした臨床試験によって,脳血管性痴呆に対する釣藤散の有効性を

報告した.その作用機序に関する研究によって,釣藤散の微小循環改善作用,血液レオロジー因子改善作用,血管弛緩作用,血管内皮機能保護作用,神経細胞保護作用等が明らかとなった.

脳血管障害患者さんに漢方治療を行う際には,瘀血を微小循環の改善を基本とし,同時に個々の患者さん特有の随伴症状の改善を目的とした治療が好ましいと考える.

2 江戸時代の(漢方)医学

 小曾戸 洋(北里研究所
 東洋医学総合研究所)

近世日本漢方隆盛の端緒を開いた泰斗は曲直瀬道三である.道三は金元明の医学を日本に定着させた人物で,主著に「啓迪集」がある.養嗣子玄朔をはじめ,一門によって引き継がれた曲直瀬医学はとりわけ江戸前期に盛行し,江戸末期に及んだ.この流派を後に興った古方派に対して後世方派と呼んでいる.

江戸中期以降の日本漢方界は「傷寒論」を信奉する流派,いわゆる古方派によって大勢が占められるようになった.それはいたずらに陰陽五行・運氣説に拘泥する金元流に対する批判から起こったものといわれるが,実はその端緒は中国にある.しかし実用を重んずる日本人は,この流派を大いに支持し,さらに徹底的に議論を展開して簡素化を推し進めた.この古方派に属する人々に名古屋玄医,後藤良山,香川修庵,山脇東洋,そして吉益東洞などがいる.とくに東洞は万病一毒論を説き,「類聚方」「薬徴」などを著した.日本漢方のモットーとする方証相對説はここに根ざしている.

流派を問わず臨床に有用ものは享受するという柔軟なグループもあった.折衷派という.和田東郭,そして幕末から明治前期の漢方界の巨頭として知られた浅田宗伯はその代表的人物といえる.蘭学との折衷をはかった華岡青洲もそれに属するであろう.

一方,江戸末期には多紀元簡・元堅に代表される考証学派も活躍し,明治に入ってその業績は中国に逆輸入され,高い評価をうけた.